データをもとに東京大学の現在地と課題を探る

東京大学は世界トップクラスの大学として国内外で高い評価を受ける一方で、国際化や研究インパクトの向上など、さらなる発展に向けた課題も抱えています。ここでは各種データから東京大学の現在地を確認し、未来社会の創造に向けて乗り越えるべき課題を考えます。

世界大学ランキングにおける評価

毎年発表される世界大学ランキングはその都度話題になるものの、大学の価値そのものを示すものではありません。異なる制度や環境のもとで発展してきた大学を単純に比較することには限界があります。また、論文以外の研究成果である書籍や作品、課題解決への貢献などは十分に考慮されているとは言えません。一方で、何が評価され、何が課題かを知る上では有用な視点を提供します。まずは知名度の高いTimes Higher Education（THE）社が実施する世界大学ランキングの評価項目（表1）を手掛かりに、東京大学の強みと課題を整理します。

このうち「Teaching」と「Research Environment」では、THE社が世界中の研究者を対象に独自のアンケート調査を行って数値化する『評判』が大きなウエイトを占めます。東アジア初の近代的な大学として教育研究を牽引してきた歴史を有する東京大学は特にアジア各国から高い評価を得ています。一方、エルゼビア社の論文データベースをもとに論文がどの程度引用されているかを評価する「Research Quality」、外国人学生比率・外国人教員比率・国際共著論文比率を評価する「International Outlook」では苦戦が続いています。

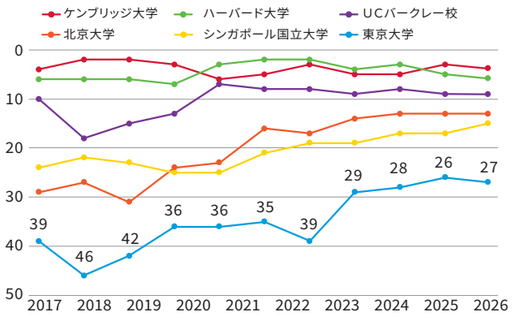


図1　THE世界大学ランキングの順位推移

※UCバークレー校はカリフォルニア大学バークレー校の略称。アメリカの州立大学で、10のキャンパスから成るカリフォルニア大学システムのひとつ。

長年、英語圏の有名大学が上位を占めてきましたが、中国をはじめとする新興国の大学が順位を上げており、アジアのトップは11位の清華大学で、13位の北京大学、15位のシンガポール国立大学が続きます。東京大学は今後、新たな学術領域創出を先導することや国際的な学術ネットワークにおける存在感をさらに高めていくことが必要であり、そのことが結果的にランキングの順位上昇にもつながると考えられます。

表1　THE世界大学ランキング2027の評価項目と配点、東京大学の順位

Pillars	Metrics	配点	順位（世界）	順位（アジア）	順位（国内）
Teaching	評判（教育）	15.0%	10	3	1
	学生数／教員数	4.5%			
	博士号授与数／学士号授与数	2.0%			
	博士号授与数／教員数	5.5%			
	機関収入／教員数	2.5%			
Research Environment	評判（研究）	18.0%	13	3	1
	研究費収入／教員数	5.5%			
	論文数／（教員数＋研究者数）	5.5%			
Research Quality	FWCI	15.0%	644	235	2
	FWCIの75パーセンタイル値	5.0%			
	FWCI Top10%論文数	5.0%			
	被引用の質	5.0%			
Industry	産業界からの収入／教員数	2.0%	1	1	1
	特許に引用された回数	2.0%			
International Outlook	外国人学生数／学生数	2.5%	879	231	8
	外国人教員数／教員数	2.5%			
	国際共著論文数／論文数	2.5%			

東京大学の教育環境

東京大学は、幅広い学問領域にわたり、高い専門知識と知的能力を持つ博士人材の輩出に大きな役割を果たしてきました。例年、日本の博士号授与者の8%程度を占めています。2021年には博士課程学生への経済的支援を強化する「SPRING GX」を開始し、月15万円以上の支援を受ける博士課程学生の割合は約5割に達しています（図3）。しかし、博士課程学生を研究者として処遇することが一般的な欧米と比べると、なお十分とは言えません。

一方で、留学生や女性の比率には依然として大きな課題が残されています。DEI推進に力を入れて取り組んできた結果、教員の女性比率などは改善していますが、それでも20%程度です。特に課題が顕著なのは学部で、留学生比率も女性比率も非常に低い水準にとどまっています。2027年秋から70年ぶりの新学部を含む学士・修士一貫課程として設立する「UTokyo College of Design」（36-37頁）では、授業は英語で行われ、国内外から多様な背景を有する学生を受け入れる予定です。

さらなる学術の卓越性とイノベーションのためにも、多様なバックグラウンドを持つ構成員が活躍できる環境を整えることが重要であると考えています。

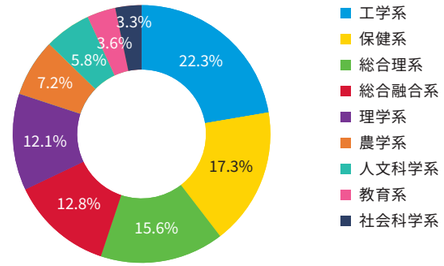


図2　学系別の博士課程学生数（2025年5月1日現在）

※国立大学法人評価における「学系」ごとに区分。

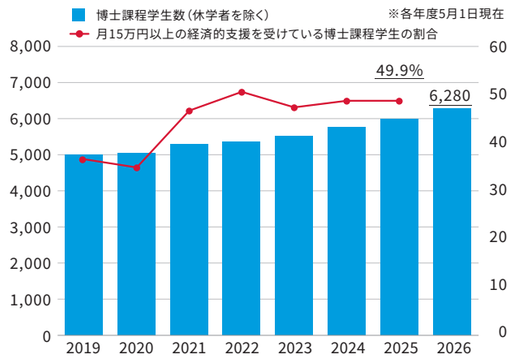


図3　博士課程学生数と経済的支援の状況※

※博士課程学生が研究活動に専念できるよう生活費相当を支給する、以下の制度により奨励金等を支給する学生の割合。民間企業・財団や本学各部局独自の制度による受給者は含まない。
日本学術振興会特別研究員、国費外国人留学生、リーディング大学院、国際卓越大学院、東大フェローシップ、SPRING GX、BOOST NAIS

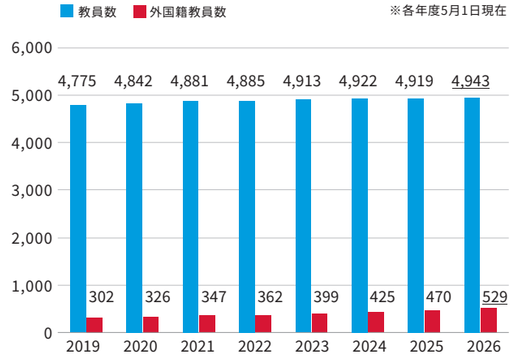


図4　教員数と外国籍教員数の推移

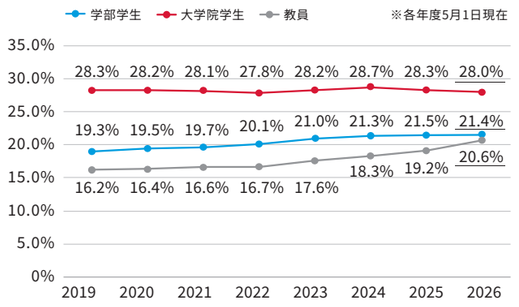


図5　女性比率の推移

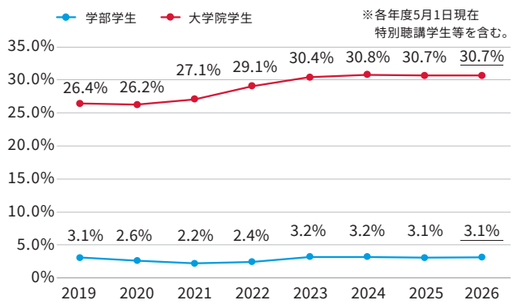


図6　留学生比率の推移

東京大学の研究力

中国をはじめとする新興国が活発な科学技術投資を行っているため、論文生産における先進国の優位性は低くなっています。そのような中にあっても、東京大学は年間1万本を越える論文を継続的に生み出し、質・量ともに国内トップクラスの研究成果を創出しています。一方、海外のトップ大学と比べると論文の被引用数が少なく、Top10%論文割合が低いことは課題です（図7）。東京大学は、発信力の強化、国際的な研究活動への参画、海外における研究拠点の構築などをこれまで以上に積極化することに加え、32-33頁で紹介する国際統合研究基盤（GRI）の構築にも挑戦し、世界から注目される研究の層をさらに厚くすることを目指します。

Nature Index（表2）では、東京大学は自然科学を中心に世界トップレベルの研究力を示しており、特に物理科学では世界9位にランクインしています。応用科学では中国が圧倒的で、保健科学や社会科学では欧米の大学が上位を占めますが、東京大学は特定分野に偏ることなく、すべての分野で存在感を示しています。複雑な社会課題を解決するためには学際的なアプローチが有効であり、幅広い研究分野でバランス良く研究を行っていることが東京大学の大きな強みといえます。

表2　Nature Index における東京大学の順位

分野	順位（世界）
応用科学	47
保健科学	83
自然科学	16
生命科学	29
化学	33
地球・環境科学	37
物理科学	9
社会科学	93

※Nature Indexは、世界トップクラスのジャーナルに掲載された論文データを集計し、研究機関ごとの貢献度を数値化した指標。順位は Research Leaders 2026に基づく。

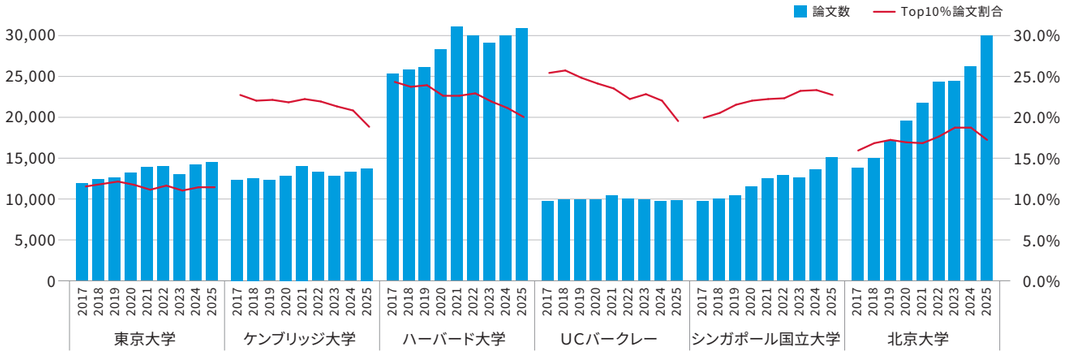


図7　各大学の論文数とTop10%論文割合の推移

※2026年10月20日にSciValより抽出したデータをもとに作成。Articles, reviews, conference papers, books and book chaptersが対象。
※Nature Indexと同様、基本的に英語論文のみが対象となり、分野によっては多くの論文が評価の対象外となっている点に注意が必要。
※Top10%論文割合は、同じ分野や出版年の論文の中で、被引用数がTop10%の論文の割合。日本全体では8.1%。

COLUMN

多様な知をつなぐ戦略的学術経営基盤の構築



学術経営インテリジェンス室　坂田一郎 室長

学術経営を効果的に動かすには、世界の先端研究の潮流や台頭する新領域・融合領域、それらを主導している人材、学内構成員の研究や教育のポテンシャル、あるいは世界的な課題解決に欠かせない知見の組み合わせなど、内外の知に関する信頼できる情報のインプットが欠かせません。

活用できる情報には、大別して、実空間で活躍する専門家経由で入手する手触り感のある情報と、大規模な学術論文データベースやUTokyo Data Bank等に収録された客観的データの2種類があります。2026年4月に新設された学術経営インテリジェンス室では、それらを統合して分析を行い、学術経営に必要な知見を提供します。また、論文、書籍、作品など本学の研究と教育、社会貢献に関する多様な情報を集めたUTokyo Discoveryを公開し、戦略の策定や有望研究者の探索などを支援する独自の分析サービス・ツールを開発・運営していきます。

東京大学の財務状況

優秀な研究者をめぐる国際的な獲得競争は激しく、質・量ともに十分な研究支援スタッフを雇用し、最先端の研究環境を整えるためには巨額の資金が必要です。東京大学は産学連携を含めた外部資金の獲得に力を入れており、教員数は大きく増えない中、研究費収入は増加基調にあります（図8）。一方で、研究活動を拡大させるということは各種コストの増大にもつながり、物価上昇や円安、施設の老朽化といった逆風の中、近年は特に厳しい財政状況が続いています。

海外のトップ大学に目を向けると（図9、10）、ケンブリッジ大学やハーバード大学は奨学金を充実させつつも高額な授業料を設定し、社会人教育も含めた授業料収入が財政的に大きな役割を果たしています。ケンブリッジ大学は1534年に設立された世界最古の出版社であるケンブリッジ大学出版局からの出版事業収入や英語検定実施等による収入、ハーバード大学は10兆円に迫る世界最大規模の大学基金から得られる約4,500億円の投資収入が特徴的です。一方、スイスのチューリッヒ工科大学は授業料を低廉に設定しており、国からの交付金や研究費収入が活動を支えています。北京大学やシンガポール国立大学も国の科学技術政策の一環として手厚い支援を受けています。

東京大学は2004年の国立大学法人化以降、研究費の獲得を中心に資金源の多角化を進めてきました。寄付金の獲得も進めており、2023年にはCIO（Chief Investment Officer）が就任し、寄付金を原資とした運用を高度化しています。今後は収入を伸ばすだけでなく、GRIの整備や業務構造改革に取り組むことで効果的かつ効率的な研究体制を構築し、世界最高水準の研究拠点としてさらなる高みを目指していきます。

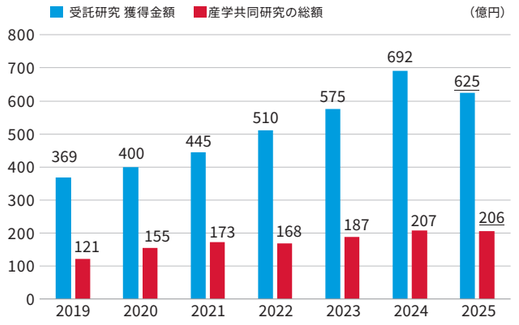


図8　東京大学の研究費収入の推移

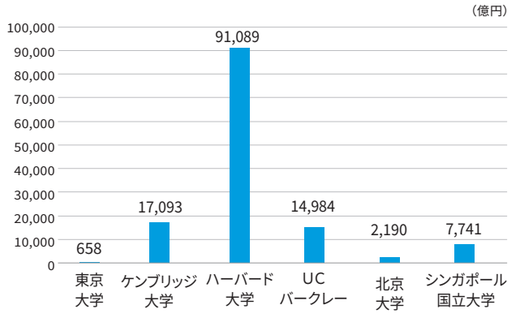


図9　各大学の基金の規模※

※各大学の財務諸表等より2025年度末又は2024年度末の残高をもとに作成。1ドル160円、1ポンド210円、1人民元23円、1シンガポールドル120円で円換算（以下同様）。ケンブリッジ大学の大学基金には各カレッジ独自の大学基金を含み、北京大学は北京大学教育基金会の純資産合計を参照。

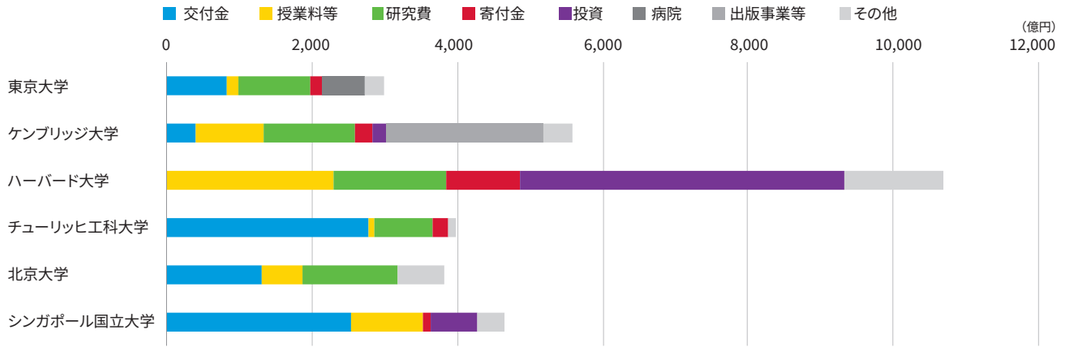


図10　各大学の収入内訳

※各大学の財務諸表等より2025年度実績又は2024年度実績をもとに作成。1スイスフラン200円で円換算。国や大学ごとに会計基準が異なり、財務諸表上で一律に比較することはできないが、あくまで参考として掲載。